学位論文審査の結果の要旨

氷見 理

本研究は、労働市場構造が地域間で近年は収斂化していることを仮説としながら、この仮説自体を実証するとともに、さらにこの収斂化の下で進行している「雇用劣化」が農業に及ぼす作用を明らかにすることを課題としている。研究方法は、文献調査、統計分析、長野県上伊那郡宮田村・中川村と茨城県稲敷市における集落調査に基づく農地保有世帯及び農業経営体の実態分析である。

こうした課題と研究方法の下、特に以下のような新たな知見を得ている。第1に、兼業農家の農外就業先の労働条件として、正規雇用ではあるが低賃金であるものを析出し、これを「非年功型正規雇用」という概念で捉えていること。また、「非年功型正規雇用」や非正規雇用の増加を、「雇用劣化」という概念で捉えていること。第2に、「雇用劣化」は、従来、日本的雇用を特徴づけるとされてきた年功賃金体系の崩れを意味しているが、このことを、統計資料を使って全国傾向として確認していること。第3に、近年急速に進行している農業構造変動は、「非年功型正規雇用」の兼業従事者が、もはや農業と農外就業とを両立させることが困難になっていることから生じていることを明らかにしたこと。第4に、「雇用劣化」は、低賃金労働力を利用する資本制的な農業経営の発展をもたらしていることを明らかにしたこと。

以上のように、本論文が新しい概念と知見を有すること、論文の内容・構成および公表論文数などから、本学位論文審査委員会は、全員一致して、本論文は博士（農学）の学位論文として十分価値があるものと判断し、合格と判定した。

最終試験の結果の要旨

氷見 理

最終試験は、平成31年1月12日に東京農工大学農学部にて、学位論文の公開発表に引き続き、論文審査委員により行われた。最終試験では学位論文の専門領域に関する質疑応答がなされた。その結果、本審査委員会は氷見君が自立して研究を進めることができる学力と見識を有しており、博士（農学）の学位を授与するに足る資格があると認め、最終試験を合格と判断した。